

## 既知と未知

北原 保雄

昨今、既知・未知という術語を用いた論考が多いが、その概念規定にずれのあるものがまま見受けられるように思われる。私は、既知・未知はあくまでも情報を伝達する上で区別される概念で、すでに知られている古い情報としてあつかわれるものを既知（の情報）といい、まだ知られていない新しい情報としてあつかわれるものを

未知（の情報）というと考えている。それは、話し手や聞き手がその情報をすでに知っているとか、まだ知らないとかいうこととは必ずしも一致しない。あくまでも、情報伝達の上でどのようなあつかわれるかという問題である、と考えている。そして、これが最も普通の考え方であろう。たとえば、

ここが 有名な岡田山古墳です。

という表現は、「どこかが有名な岡田山古墳である。」ということをも前提に、そのどこかが「ここ」であることを伝達しようとするものである。この表現においては、「有名な岡田山古墳」の部分はすでに知られている古い情報としてあつかわれている。そして、「ここ」の部分はまだ知られていない新しい情報としてあつかわれている。古墳の現場に行つて、「ここ」と指をさして説明しているのだから、「ここ」は話し手にとって既知の場所であり、また、指さされた場所を見ながら聞いている聞き手にとつても、既知の場所である。しかし、情報伝達上、既知というのは、そういうことをいうのではない。「ここ」が未知だというのは、そこが「有名な岡田山古墳」であるという点で新しい情報だということである。「ここ」だけを問題にして、それが既知であるか未知であるかを論じてはならない。そういう論じ方をすると、

これが 有名な岡田山古墳です。

これは 有名な岡田山古墳です。

の区別がつかなくなってしまう。

「有名な岡田山古墳」の部分にしても、岡田山古墳から鉄剣が出土したことを知らない人にとっては、未知のことである。しかし、この表現においては、既知の情報としてあつかわれているというこ

とである。

右のような考え方からすると、どうも賛同しかねる論がある。本誌一三五集短信欄の半藤英明氏の「既知・未知」と「こそ」も、その一つである。氏は、

あの人にこのことを相談してみよう。あの人こそ。そわたくしにとつては全知識である。(中河与一『天の夕顔』)

の「あの人」は既知であるという。どうしてそう解されるかという理由は示されていないが、「あの人にこのことを相談してみよう」という表現があるから、この文章の書き手には、そして読み手にも、次に出てくる「あの人こそ」の「あの人」は、既知だと解されるという解釈がなされたものようである。それは、一緒にあげられている他の二例からも想像される。

しかし、前述のような私の考え方からすれば、「あの人」についてのどんなに詳しい情報ですでに伝達されていて、「あの人こそ……」の「あの人」が既知だということにはならない。「あの人」が既知であるか未知であるかは、「わたくしにとつては全知識である」の「あの人」であることが既知であるか未知であるかによってのみ決定される。この例の場合などは、既知とも未知とも解されそうである。

つづいて、氏は、「こそ」の上接語が既知になることの傍証として、「代名詞+こそ」の例が非常に多いことをあげている。

この一夜を、一人でのびのびと寝床に横たわり、昨日まで繰り返した義務の御褒美の安息を貪ろう。純潔な、乱れないシートの上で目をさまそう。これこそ最上の御褒美だ。(三島由紀夫

『禁色』)

しかし、前述のような私の考え方からすれば、代名詞(特に、指示代名詞をいうのであるうが)は、決して、常に既知を表すものではない。右の例も、「これは……」(既知)、「これが……」(未知)の両様に置き換えることができる。氏は、右の例を、「既知+既知」だというが、情報伝達上、すべての部分が既知である表現にどういう意味があるのだろうか。未知の情報を伝えることに伝達の意義があるのではないか。「既知+既知」というのは、きわめて限られた特殊な表現だと思っただが、いかがであろうか。

ここでは、既知・未知のとらえ方についてだけ述べたので、半藤氏の論の後半についてはふれないが、現代語の「こそ」は、「こそは」とも「こそが」とも連接しうるので、その上接語は、既知・未知の両方を表しうるように思われる。したがって、氏のあげた三つの型(ただし、前述のように二番目の「既知+既知」は存疑)のほかに、第四の型「未知+未知」も存在することが予想される。

——筑波大学助教授——  
(昭和五十九年一月十一日 受理)